

昔々、ヌガ・ムドムボジという人がいた。彼はヌガジジャのスルタンだったが、古い時代のスルタンのひとりだった。彼には、ピルザという子供がいた。当然、ピルザの名前は、ピルザ・イエ・ヌガ・ムドムボジとなる。ピルザの父は自分の家に人々を食事に招いた。彼はそこでアンダという名前で知られることを思いついた。アンダという言葉は、コモロの風俗習慣で用いられる。息子ピルザも、ひとりの子供、つまりイエ・ヌガ・ムドムボジの孫を儲け、その子を結婚させようとした。彼[ピルザ]は言った。

「偉大なるコモロの民よ、私は息子を結婚させようと思う。自分の息子を結婚させる時、何をしようか？ 自分の息子を結婚させる時には、それぞれの地方から、我々に値する贈り物がもたらされることが期待される。それは山羊とそれが持ち得るすべてだ」。

その後も彼は続けた。

「おお、地方のスルタンたちよ」。

ンガジジャの地方は、イツァンドラ、ハマハメ、ワシリ、ディマニ、ムバジニ、ハムブから成っていた。彼はムバジニから始めることにして言った。

「おお、ムバジニの親愛なる兄弟たちよ、私は息子を結婚させる。私ピルザは息子を結婚させるので、そのために使者を遣わさず、自ら来た。私が息子を結婚させるのだから、ここに来たのは、あなたの雄山羊を連れて行くことを言うためだ。というのも、ムバジニの人々は偉大なるコモロ語を話すことが出来、話された方は、自分に対して話されたことがわからないほどだからだ。ムバジニの人は、言われた当人が気づかないまま、侮辱することが出来る。話すということを知っているのだ」。

彼はそこを離れ、ハムブに着いて人々に言った。

「おお、ハムブの人々よ、私は、あなた方が、話すことの、力を有することの知恵を持っていることを知っている。私は息子を結婚させるので、あなた方が、力を持つ知恵を持って来てくれることを望む」。

次いで彼はバンバオに着いて言った。

「おお、バンバオの人々よ、私は息子を結婚させることを告げに来た。息子を結婚させる時には、力を求める。あなた方が雄山羊、バンバオの雄山羊を持ってきてくれることを望む。何故なら、バンバオの人々は余りに潔癖で、不潔さを好まないからだ。そこであなた方の仕事は家に関わることで、絨毯を敷いてほしい。バンバオの人々は清潔さを好むからだ」。

彼は次にイツァンドラに着いて言った。

「おお、イツァンドラの人々よ、承知の通り、イツァンドラの人々は、子供を結婚させようとする判事を祝おうとする人々であり、何故ならばあなた方はイツァンドラに思想家を輩出しているからだ」。

それから彼はムドゥベに行った。ただ、思い違いをしないでほしいが、イツァンドラとハマンヴェウは同じ地方だ。だから彼はムドゥベに行き行って言った。

「おお、ムドゥベの人々よ」。

ムドゥベのスルタンはヌティベという名だった。ヌティベはマンザの村で生まれ、無駄口ばかり叩いていた。

「おお、ムトゥベの人々よ、あなた方のスルタンはヌティベだ。どうやってヌティベに役立ってもらおうか？ あなたの役割は、祭りを妨害しようとする者が失踪する度にそれを私に知らせることだ」。

それから彼はミツァミウリに行ったが、その特産物は、イカメという良質の緑のバナナだった。

「おお、善き生活と住いを持つミツァミウリの人々よ、あなた方には、家を整えに、白く塗りに来て欲しい。何故ならば、ミツァミウリの人々はアンダをそれほど好きではないが、彼らは家を整えることを好み、きれいな家とイカメという素晴らしいバナナを持っているからだ」。

彼は次に、小さなことが嫌いな人々が住むハマハメに行った。彼らは小さな祭りも好きではなかった。

「おお、ハマハメの人々よ、私があなた方に頼むのはただ、祭りにかかりきりになることだ。あなた方の役割は、誰も、祭りに関わる何かを損ないに来ないように見張ることだ」。

彼は、ワシリとディマニに行った。その人々は同じ炉辺で食事をする人々だった。そのスルタンは懇願する術を心得ていた。彼はそこで言った。

「おお、ワシリとディマニの人々よ、あなた方は懇願する術を知っているのだから、あなた方の仕事を怠らないように、つまり、私が招待した人々に、式典に花を添えるよう懇願し続けて欲しい」。

このようにしてペルザは彼の子供を結婚させる準備をした。その後彼は、イツァンドラに住んでいるモアンラリという名の彼の姉妹を迎えに行き、そこには、イツァンドラのバツァから来たフェスメという女性がいたが、その女性と[息子とを]結婚させたのだった。モロニの町のシャシャンヨンゴで結婚は執り行われ、式典が催された。